

Title	立木,園生兩貝塚魚骨
Sub Title	Fish bones in neolithic shell mounds at Tachiki and Sonno
Author	大給, 尹(Ogyu, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.3 (1948. 11) ,p.124(384)- 124(384)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19481100-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

立木、園生兩貝塚魚骨

大 給 尹

下總國北相馬郡文間村立木貝塚と同國千葉市園生町長者山貝塚に於て、三田史學會の人々が發掘した魚骨について、記述するよう求められたので、以下挿圖によつて簡単に記載する。(口繪B參照)

○立木貝塚

1、コイ *Cyprinus carpio* Linnaeus

右側咽頭齒 pharyngeal teeth (圖1)

左側鰓蓋主骨 opercle (圖2)

鯉は、咽頭齒も鰓蓋主骨も共に小破損してゐるが、保存は良好である。同一個體の部分であるとは言明出来ないが、兩者はほとんど同體長のもの、部分と覺しい大きさである。鯉の咽頭齒は、しばしば發見されるが、鰓蓋主骨は余り採集された事を聞かない。圖2の如く、表面には恰度鹿角の表面に見るやうな畦狀の隆起があつて、特徴的である。全體は余り反つてゐない。この兩骨の大きさとその肥厚から考へると、體長は六〇糎(二尺)位、體重は一貫匁近い老成した鯉であつたと思はれる。一般的に云へば、魚骨は、その種類によつて到達す

る或程度までの大ききになると、大ききの方は停止して、骨の厚さが増大するものであるから骨の肥厚の度合がその老成を知る資料となるものである。

2、スズキ *Lateolabrax japonicus*.

(Cuv. & Val.) 右側齒骨 dentary

(圖3) 右側鰓蓋主骨

3、クロダイ *Sporus longispinis*

(Tem. & Sch.)

右側上顎前骨 premaxillary (圖4)

4、マダイ *Pagrosomus major*

(Tem. & Sch.) 左側齒骨 (圖5)

鱸・黒鯛・眞鯛の上顎前骨、齒骨、鰓蓋主骨などは、いづれも、何處の貝塚でも殆んど必ず見かけるものであり、圖示した大きさのものも普通良くある大きさである。鱸の齒骨即ち下顎の齒のある骨(圖3)と鰓蓋骨から推測すると、共に、體長五五糎前後のものであつたと思はれる。黒鯛の上顎前骨からは、體長約三五糎位、眞鯛(即ち普通赤鯛又は鯛)の齒骨からは五〇糎位の體長があつたものと考へられる。云ふ迄もなく、鯉は淡水産であり、鱸と黒鯛は淡

水の多く混ざる河口等に好んで集まる種類である。

○園生貝塚

1、マダイ *Pagrosomus major*

(Tem. & Sch.)

左側上顎前骨 (圖6)

園生の眞鯛は貝塚産としてほ小さい部類である。復原體長四〇糎位である。

2、コチ *Platycephalus indicus*

(Linne)

左側齒骨 (圖7)

鯛は從來餘り注意されてゐなかつたが、貝塚に稀らしい種類ではないと想像される。齒骨は圖7の如く、細く、相當彎曲しその底面は平たい。齒は内側の一列はやゝ大きく、内側に曲つて居り、その外側に二列乃至四列細い圓錐形の齒が密生してゐる。齒槽(齒の抜けた跡)は、内側の一列は、楕圓形でやゝ大きく、その外側に小圓形の跡が密生して見える。(拙著「ハモとコチに就て」史前學雜誌一五ノ一、參照)資料が不足なので正確は期し難いが、この齒骨からは、生時の體長が四〇糎以上あつたと推測される。砂質の海底に好んで棲む類である。(一九四七・一〇・一五)